

婚約者様、どうぞご勝手に。
捨てられましたでしたが幸せなので。

登場人物紹介

トルタヤ

ニーダル支部に配属されている
アリスミの同僚。
やんちゃな印象だが面倒見がよく、
ムードメーカー的存在。

長老

ニーダル支部の支部長。
普段は飄々としており、
サボり癖がある。

アティカ

ザインの息子。天使のように可愛らしく、
素直で礼儀正しい性格。
生まれつき膨大な魔力を持つが、
幼いながらもその力を上手に制御している。
父親のことが大好き。

ロザリー

アリスミの元親友で、ザインの現在の恋人。
容姿端麗でファッションにこだわり、
裏表のないはっきりとした性格。

ザイン

世界に三人しか存在しない
「最上位魔術師」の称号を持つ。
感情を表に出すことが少なく、寡黙。
過去にアリスミと恋人関係にあったが、
彼女が昏睡状態の間に
親友ロザリーと結ばれた。

アリスミ

とある事故で重傷を負い、
二ヶ月の昏睡状態に陥った主人公。
目覚めると、恋人ザインと
親友ロザリーに裏切られ、居場所を失い
辺境ニーダルへ追放される。

序章 始まり……

それは一瞬の出来事だった。

眩いばかりの閃光に体が包まれたと思ったら、次の瞬間には地面に叩きつけられていた。

体の痛みに悶えながら、心のなかに何かが入ってくるような気持ち悪さを覚え、私——アリスミはえずく。

「……ッ、ゴホッ。だ、大丈夫で、すか……」

目を閉じたまま、一緒に巡回していた魔術師に声をかけるが、答えは返ってこない。すぐそばに立っていたのに。

彼女はどこ……

弄るように地面の上で手を動かしてみたけれど、触れるものは何もない。

閃光に逆らい目を開けると、手は届かない距離だけすぐ隣に彼女は倒れていた。彼女は苦痛の表情を浮かべることなく、目を開け私のほうを見ている。

「動け……ますか……?」

痛みに耐えながらも一度声をかけてみるが、彼女の唇は動かない。微動だにしない彼女をよく

見ると、気を失った瞳はもう何も映していなかった。

彼女は私よりも等級が上だったのに命を奪われていた。

どうしてっ、こんなことに……

私は生まれて初めて死というものを意識した。

この世界には『魔術師』と呼ばれる人たちがいる。人は誰もが魔力を持って生まれてくる。

ただ、体内に宿す魔力を紡げる者は多くない。紡いだ魔力を糧として術式を展開できる者だけが魔術師とされるのだ。

またひと括りに魔術師といっても、上位と下位ではその実力は天と地ほどの差がある。

私も魔術師の端くれだけど、等級が低いので危険な任務を任されることはなかった。

今回だって王都を囲う防衛術式に綻びがないか目視で確認する簡単な作業だった。異常を見つけてもその場で対処することはなく、上に報告すればいいだけ。

巡回が終わったら家に帰って手際よく夕食を作って、いつものように過ごすはずだったのだ。

『早く帰るからね』と言ったのに……

まるで底なし沼にのまれるかのように意識が朦朧とし、弛緩した体は動かなくなる。まだ微かに動く唇で、私にとって一番愛しい名を紡ぐ。

「……………」

禍々しい光に蹴散らされてしまった声は、私の耳に届くことはなかった。一筋の涙が冷たくなっていく私の頬を伝う。私も彼女のように死ぬのだろうか。

——嫌、死にたくない！

強い思いは生への執着ではなかった。ただ、愛する人を残して逝きたくないだけ。

『…………ごめんね』と心のなかで呟きながら、私の目も何も何も映さなくなった。

第一章 奇跡からの絶望

「……ック。……聞こ……いるか、カロック。アリスミ・カロック」

耳元で誰かが私の名を何度も呼んでいる。

しつこく繰り返されるのを止めようと口を開きかけ、自分が目を開けていないことに気づく。なんで私は寝ているのだろうかと思いつながら、ゆっくりと重い瞼を開けた。

白い髭を生やした顔——白衣を纏っているの、たぶんお医者様——が覗き込むように私を見ていた。その姿を見てなぜ自分が寝ていたのか記憶が繋がる。

私、生きてる……

「きこえ……ま、す」

私の声は掠れて聞き取りづらいものだけど、医者は満足気にうなずき、私の手首を掴み脈を測る。続いて、目や耳や手足の動きを診ていく。こんなに丁寧に診る必要があるのかと思えるほど、その診察は入念だった。

訝しむ私に医者が答えてくれたのは、ひと通り確認し安堵の息をついたあとだった。

「防御術式に仕掛けられていた罠のせい、君は二ヶ月間も生死の境を彷徨っていたんだ。正直だめだと思っていたが、こうして君は目覚めた。まさに奇跡だよ」

「あの、もうひとりの魔術師はどうなりましたか？」

生気を失った彼女の瞳を覚えているけれど、一縷の望みにかけて尋ねる。

しかし、医者は頭を左右に振りながら「残念ながら即死だった」と落ち着いた口調で告げた。

「君は本当に幸運だったんだ。体の欠損もないし、後遺症も今のところ見当たらない。しばらく体が重く感じられるだろうが、それは寝たきりだったから筋力が低下しているせいだ。時間とともに解消される。安心していい」

「……はい」

患者の回復を素直に喜んでいる医者を前にして、私は言葉少なに答える。

生きていることはうれしかったけれど、素直に喜ぶことはできなかった。

医者にとつてもうひとりの魔術師の死は二ヶ月前の出来事で、その事実を受け止める時間は十分にあった。

でも、私にとつてはたった数時間前のこと……

——すぐ目の前でひとつの命が消えた。

亡くなった魔術師は王都に異動してきたばかりで、一緒に仕事をしたのはあの日が初めて。

『よろしく願います。八等級のアリスミ・カロックです』

握手を求めて手を差し出した。

『ふーん。あなたが、あの有名なカロックなのね。私は五等級よ。あなたが私の足手まといにならないことを心から願っているわ』

『はい、頑張ります』

握り返されなかった手を、私はさり気なく引っ込めた。

彼女の態度は友好的とは言い難いものだった。名乗ってもくれなかったから、名前だつて知らない。

……あとで誰かに聞こうと思つていたのに。

魔術師の階級はこの国でも共通。十等級から始まりその実力に応じて、九等級、八等級と順に上がっていく。年齢も身分も関係なく、実力が重視される世界。

魔術は使い方を一步間違えると、思わぬ惨事を生み出す。

それを防ぐために指揮系統がはつきりしている——上の者の命令は絶対だ。

中にはその意味を履き違えて、自分よりも下位の者を軽んじる人も残念ながらいる。……彼女のよう。

でも、あの態度はそれだけが理由ではないと思つている。彼女は鼻で笑いながら私をジロジロと見ていたから。

あの有名なという言葉は皮肉を込めてだ。

私の恋人は『最上位』の称号を持つ魔術師——ザイン・リシーヴァだった。公言していたわけではなかったけれど、六年も付き合っていたら自然と周囲に知られるものだ。噂が届かないほどの田舎に住んでいる、もしくは他人に無関心でなければ、ほとんどの魔術師が私たちの関係を知っているだろう。

最上位とは一等級をも凌駕する存在で、現時点では彼を含めて世界に三人しかいない。その存在は、ある意味国を治める王よりも希少といえる。

そんなすごい魔術師の恋人が、下から数えたほうが早い八等級——私ごときなのが、気に入らない人も少なくない。

……たぶん、彼女もそのうちのひとり。

友人にはなれそうになかった、それでも同僚を失うのは心が痛む。

診察を終えた医者が今後の注意事項を説明していると、扉を叩く音がしてふたりの魔術師が入ってきた。

ひとりの肩には紙魔鳥——紙を折り作った鳥に魔力を流し込み連絡手段として魔術師は使っている——がとまっていた。

私の目覚めの連絡を受け駆けつけてくれたのだろう。

「もう、どれだけ寝るのよ！ アリスミ。職務怠慢でクビになつても、かばつてあげないんだからね！」

上半身を起こしている私に、金髪碧眼で容姿端麗の女性——ロザリー・シルエットが遠慮なく抱きついてくる。髪は乱れ、額には薄らと汗が滲み、肩で息をしている。

自慢の髪型が崩れることを何よりも嫌うのに、この病室まで全力疾走で来てくれたのだろう。

彼女は同じ年だけですでに三等級の魔術師。

その美貌に釣り合った高い美意識を持っていて、凝った髪型や派手な服装にそれが反映されて

いる。魔術師に支給されているローブに手を加える者もいるが、大概の人は裾の長さを変えるのみ。でも、彼女はお洒落に改造していた。

裏表のない性格ゆえに思ったことをはつきりと口にするけれど、嫌味がないから周囲から反感を持たれない。

——私の自慢の親友。

私の顔は彼女の豊満な胸に埋まる形になってしまふ。……日常に戻ったと実感し、自然と肩の力が抜ける。

「困りますよ。彼女はまだ目覚めたばかりなんですから！」

医者が慌てて声を上げる。でも、ロザリーは私を優しく抱きしめたまま。離れる気はさらさらないようで、突っかかるような視線を医者に向ける。

「あら？ 何か体に問題が見つかったの？」

「いえ、それは大丈夫ですが——」

「それなら問題はないわね。ただお見舞いに来ただけなのだから。ね？」

ロザリーは振り返って一緒に来た魔術師——私の恋人に同意を求める。

青銀の長髪を後ろで括っているザインは、表情が乏しいけれど優美な彫刻のように整った顔立ちをしている。瞳の色は、人が決して近づけない湖底の濁りのない水を連想させる深淵の青。そのうえ寡黙な人だから『下々の者とは口がきけないってか！ 最上位だからとお高く止まりやがって……』と陰口を叩く人もいる。

でも、私は本当の彼を知っている——そんな人じゃない。

膨大な魔力を有している彼は、幼い頃隔離されていた。……つまり、家族から虐げられていたのだ。

だから、人と接するのが得意でないだけ。無表情で寡黙なのは彼の生い立ちのせい。

でも、それを知っているのは私を含めて数人のみ。だから、誤解されてしまふ。

「と、とにかく患者を興奮させることは控えてください。それでは、私はこれで……」

最上位魔術師の無言を『庄』と受け取った医者は早口でそう告げると、病室から慌ただしく出ていった。

「ロザリー、心配をかけてごめんなさい。……ザイン？」

彼女から彼に視線を移し、私にとって一番愛しい人の名——あのととき、禍々しい光に蹴散らされて聞こえなかった名前を口にする。

私の感覚では数時間ぶり。でも、彼にとっては二ヶ月ぶりの再会のはずなのに、彼は扉のそばに立ったまま。

「どうしたの？ こっちに来て、ザイン」

彼に向かって伸ばした手を、横から掠め取るように握りしめたのはロザリーだった。私はザインに顔を向けたまま、視線をまた彼女に戻す。

「あなたが眠っている間にいろいろあったの。彼、本当にあなたのことを愛していたから、憔悴して生ける屍だった。いいえ、本当に死にそうだったのよ。あなたが目覚めたときに、彼が死んで

いたらだめだと思って、私、彼をひとりにしなかった。アリスミ、あなたのために」
彼女は明るい口調でそう言うと、ゆっくりと私から離れていった。そして、動かないままの彼の隣に並び立つ。

もし彼女ではなく他の女性だったら、友人以上の関係に見えるかもしれない近さ。
でも、ロザリーは私のかげがえのない親友。

それは決して揺らぐことがない事実。

——彼女のしなやかな腕が、ザインの腕に絡むそのときまでは……

私の目の前で、ザインはロザリーを拒むことなく受け入れた。

ロザリーは誰に対しても気安いところがある。酒に酔ったときなどは、軽いノリで異性と肩を組んで歌ったりしていた。

『ロザリー、それはやり過ぎよ』

『ふふ、そうかな。そんなことないと思うけどな。でも、親友に嫌われたくないからやめようかな。アリスミ、大好き。大大だーい好きだからね!』

『はいはい、私も大好きよ。ロザリー』

こんな楽しい会話を何度も繰り返してきた。

でもこれは違う、酒席での冗談とは……

ザインに腕を絡める仕草はとても自然で、慣れたものだった。この行為がふたりにとつて初めてじゃないことを物語っている。

「いつから……なの……」

掠れた声^{かす}が喉に張りつく。さつきまで痛くなかった心臓が、張り裂けそうなほど苦しくなる。見たくないのに、寄り添うふたりから目が離せなくて、息をうまく吸えない。

どうして……、どうしてなの……

ふたりに向けた問いに答えたのは、やはりロザリーだった。彼女もまた私から目を逸らすことなく、真っ直ぐに見つめ返してくる。

「私と彼がこういう関係になったのは、とても自然なことだったの。恋人を失った彼と、親友を失った私には、支え合う相手が必要だった。人はひとりでは生きていけない——辛い状況であればあるほどね」

……失った？ 過去形にしないで、私はここにいて、まだ生きているでしょ！

心のなかでロザリーの言葉に反論する。

「アリスミから見れば裏切りかもしれない。でもね、あなたは二ヶ月間も目覚めなかった。医者は覚悟しておくようにと言ったわ。私たちは紙魔鳥^{シマドリ}が大切な人の死を告げに来るのに怯えて生きていた」

ロザリーはさらに話を続ける。

「毎日が生き地獄だったのよ。この辛さは経験した人にしか分からないでしょうね。だから、理解してほしいと言わないわ。でも、私たちは裏切ったつもりはないの」

……たった二ヶ月なのに……

心のなかでそう呟く。

眠り続けていた私にとっては、二ヶ月前は昨日のこと。でも彼らにとって二ヶ月前は、もうすでに遠い過去だった。

心をすり減らしていった彼らは、過去——目覚めぬ私——に別れを告げ前を向いたと、知らされた。

彼女は笑みを絶やさず、すらすらと喋り続けている。そこに罪悪感はない。裏表のない性格だから、思ったことを素直に話しているだけなのだ。

確かに医者も奇跡だと驚いていた。……私の死はみんなのなかで確定事項だったのだろう。

もし私が死んでいたら、彼女の言う通り裏切りにはならなかった。

残された者たちが互いに慰め合って支え合い、喪失感を乗り越える。そして、新たな人生を築く相手となる。その選択を誰が責められるだろうか……誰もできない。

でも私は目覚めた、いいえ、目覚めてしまったというべきかしら。

……目覚めなかったら良かったのだろうか。

奇跡の先にあつたのは残酷な現実。

「こうなるのは運命だったと思ってるわ。私たちを認めてくれる？ アリスミ」

ロザリーは私の許しを求めた。

私が拒んだらどうするの……

心のなかでそつと呟く。

しっかりと絡まったその腕を解くとは思えない、もう答えは決まっているのだ。

でも、私はうなずけずにいた。

時間が欲しい、ザインとふたりだけで話し合う時間が。だって私たちが一緒に築いた年月は、こんなふうにならなくなってしまふほど軽いものじゃない。

一緒に暮らしていて、それはずっと続くとお互いに思っていた。歳を重ね皺だらけになっても仲良く手を繋いでいる、そんな未来を当たり前のように話していた。貴族のように書面を交わしていかなくとも、その実、私たちの関係は婚約者同士に違いなかった。

私はあなたにとって特別な存在。……そうでしょ？ ねえ、そう言ってくれたでしょ？ ザイン。

何度も何度も心のなかで叫ぶ。言葉にする勇氣はなかったから。

ぎこちなく彼のほうを見ると、いつも通りの表情の彼と目が合う。

「もうあなたはいいりません、アリスミ・カロック」

ザインが表情を変えることはなかった。

言い訳はまったくせず、とても短い彼らしい別れの言葉だけを告げる。

彼は誰に対しても敬語で話す。癖になっていてどうしても変えられないと、付き合い始めた頃に教えてくれた。

『すみません。でも誤解しないでください、あなたは他の人と違って特別です』

『私だけ？』

『そうです、あなただけです。アリスミ』

付き合つて六年経つてもそれは変わらなかつたけれど、その言葉遣いを冷たいと思つたことは一度もない。それなのに、今は他人行儀な話し方としか思えなかつた。

「もう私は……特別じゃないの……」

彼は言葉を紡ぐ代わりに深くうなずいてみせた。

——もう私は彼の特別じゃない。

吐きそうなくらい心が苦しくてたまらないのに、涙は出てこない。

辛いときや悲しいときには自然に涙が溢れるものだと思つていた。……今までそうだったから。

でも、人は受け止めきれない悲しみに直面すると、泣けないらしい。どこかが麻痺してしまつたみたい。……心が壊れないためだろうか。

強く握りしめ真つ白になつた手を、私はそつとベッドの中に隠す。

「……ありがとう、嘘をつかないでくれて。おかげで早く立ち直れるわ」

自分でも驚くくらい普通に話せた、どうしてなのか分からないけど。……たぶん、この時間を早く終わらせるため。

「アリスミなら理解してくれると思つていたわ。そうよね？ ザイン」

「はい」

見つめ合うふたりは恋人同士にしか見えない。きつと、この二ヶ月で周囲もそう思っているだろう。

私たちが三人でいると、初対面の人はロザリーのほうが彼の恋人だと勘違いした。そんな場面で

よく言われた台詞が頭の中で蘇る。

『すみません。美男美女のおふたりが、あまりにお似合いなので間違えてしまつて……』

よくある緑の瞳に、これまた珍しくない淡い茶色の髪色を持つ私は、見た目も平凡そのもの。

釣り合いを考えたら、ザインの恋人は誰もが認める美女のほうだと思つてしまうのだ。

謝罪とは言えない謝罪を、何度笑つて聞き流したことか。

あれはこの未来を暗示していたのかもしれない。彼らを見てみると、あの罫に私が巻き込まれていなかったとしても、いつかはこうなつていたのではないかと思えてくる。

これは必然だったのかな……

私のなかにあつた彼への想いが小さくなつていく気がした。

「アリスミにひとつだけお願いがあるの。これから仕事で顔を合わせたりするでしょ？ そのとき、必要以上に彼に近づかないでほしいの。あつ、嫉妬ではないのよ。周りに変に気を遣わせてしまうのが嫌なだけ。ほら、仕事に支障が出たら困るでしょ？」

ロザリーの裏表のない性格が好きだった。でも今、この瞬間から好きではなくなつた。

——もう私の親友はどこにもいなかった。

ふたりの視線が私に注がれる。待つているのだ、私という憂いが完全になくなるのを。

彼らに対して何もなかつたように接することはできなくとも、それを仕事に持ち込むような真似——悪口なんて言つたりしないのに。

私を信用できないようだ……それは私も同じ。



「私はあなたたちの邪魔はしないわ。もう昔の気持ちを思い出すこともない。誓ってあげる——
恋人にも親友にも二度と戻らないと。だから心配はいらないわ」

ザインへの想いもロザリーに抱いていた友情も、すでに潰^{つぶ}えている。六年かけて積み上げた想いでも、崩れるのは一瞬。

私の言葉にロザリーは満面の笑みで応え、ザインは何も言わずにうなずいた。

そして、彼らは「目覚めて本当に良かった」と最後に告げ……正確にはロザリーの言葉にザインがうなずき、そのあと入ってきたときと同じようにふたり揃って病室から出ていった。

彼らが最後に残した言葉に嘘はなかった。

もし私が死んでいたら、彼らは私から解放されずにいただろう。こうして区切りをつけたことで、彼らは罪悪感なく前に進めるのだ。

「何のために……私は目覚めたのかしら……」

静まり返った病室に、ポツンと私だけが取り残された。教えてくれる人は誰もいない。

いなくて良かった……よね……

誰もいない部屋で、私は涙を流せないまま肩を震わせ続けたのだった。

それから、麻痺^{まひ}した心とは裏腹に、私の体は順調に回復していった。見舞いに来た同僚の魔術師たちは『カロック、良かったな』とみな私の目覚めを心から喜んでくれた。

しかし、誰もが特定の話題を避けている。気を遣ってくれているのだと嫌でも分かった。

私とザインは付き合っただけで、小さな家を借りて一緒に暮らし始めた。でも今はその家を出て、彼は魔術師に提供されている寮に移ったという。誰かが私に教えてくれたのではなく、扉越しに小声で話す声が聞こえてきたのだ。

この意味が分からない人なんていないだろう。

私は「そんなに急がなくても……」と渋る医者を読得して、退院と職場への早期復帰を決めた。

仕事をしていたほうが気が紛れるし、何より周囲の腫れ物に触るような扱いを終わらせたかった。

……うん、早く大丈夫だと分かっても変わらないと！

復帰を翌日に控えたある日。

私はよしっ！ と気合を入れて、挨拶のために懐かしい職場へ顔を出した。

「ご迷惑をおかけしました、明日からまたよろしくお願いします」

「カロック、おかえりなさい」

「迷惑なんて思っていないから。待っていたよ、カロック」

「二ヶ月間も昏睡状態だったんだから無理しないで、徐々に慣らしていけばいいよ」

同僚たちは口々に歓迎と労いの言葉を送ってくれる。

彼らの変わらぬ態度にほっとしていると、黒い紙魔鳥が飛んできて近くの机にとまった。

紙魔鳥の色は決まっておらず、作成者である魔術師の好みに合わせて色とりどりの紙魔鳥がいる。

しかし、黒を纏うのは魔術師長からの伝達のと看みと決まっている。

この国のすべての魔術師の頂点に立つ魔術師長から送られた紙魔鳥を前にして、その場にいる魔術師全員が姿勢を正す。

それを待っていたかのように、黒い紙魔鳥は「クワアッー！」と鳴き嘴を開く。

「八等級魔術師アリスミ・カロック、本日付でニードル支部への異動を命じる。手配した馬車は南門から正午に出発する。時間厳守である。以上」

「えっ……」

紙魔鳥が告げた命令を聞いて周囲がザワつく。任期途中での辞令は前例がなく、そのうえ異動する正当な理由もなかったからだ。

ニードルとは王都から遠く離れた辺境の地で、その支部から魔術師の補充要請は出ていなかった。

国内の魔術師は全員、魔術省という機関に所属している。本部は王都にあり、各地に設けられている支部はその管轄下にあった。

魔術師は等級や経験などを踏まえて配属先が決められるが、個人的な事情や希望も考慮される。

私は王都での勤務を希望していたから、ここに配属されたのだ。応援要請に応える形で、他の支部に派遣されることはあつたけれど、それは臨時的なもので異動ではなかった。

誰もが戸惑っているなか、驚いていない魔術師がふたりだけいた。私の元恋人と元親友。

三等級魔術師といえども上を動かす力はさすがにない。けれども、最上位という称号を持つ魔術師なら可能である。

仕事に集中できない、とひと言呟けばいいだけ。八等級と最上位、王都から欠けて困るのはどちらかなんて決まっている。

私という邪魔者を追い払うために、裏でザイン・リシーヴァが動いたのは容易に察せられた。それがロザリーの願いなのか、彼なのか、それともふたりの願いなのかは知らない。分かっていることはただひとつ――私にはこの決定を覆す力がないということだけ。

優しい同僚たちは私にかけける言葉を見つけれずにいた。

この理不尽な辞令に文句を言えば、最上位魔術師に目をつけられるかも……と危惧しているのだろう。この状況でのザインの無表情を『庄』と感じているのだ。

嫌な緊張感が漂い、ざわつきが沈黙に変わる。

「あー、ちょうど良かったです。綺麗な空気を吸いたいと思っていたので。私から異動を申請する手間が省けました。ニーダルの名物ってなんでしょうか？ 新鮮な川魚とかでしょうか。ふふ、今から楽しみですよ」

この場にそぐわない明るい口調で私が沈黙を破ると、同僚たちはぎこちない笑みを浮かべながら続く。

「そ、そうだな！ 王都は人が多いから空気が悪い。住むなら田舎が一番。健康体になれること間違いないだ」

「そうね！ 自然豊かなところで生活できるなんて羨ましいわ。カロック、遊びに行くわね」

一生懸命声を弾ませてくれる。この気遣いを無駄にしたくない。

「落ち着いたら連絡しますね、みなさん。申し訳ありませんが、私だけ新鮮な空気を存分に吸って長生きさせていただきます。ご長寿魔術師というふたつ名は未来の私のものですから、誰も使わないでくださいね。絶対ですよ！」

ものすごく真面目な顔をして私が念を押すと、どつと笑い声が上がった。みんなが浮かべていた作り笑いが、見慣れた本物の笑みに変わる。

……これでいいわ。

無関係の彼らに気まずい思いをさせたくない。

十七歳で魔術師となった私は王都に配属され、六年間ずっとここに所属している。

いろんな人と出会い、たくさんのかを教えてもらい、多くの人に支えられてきた。良い思い出だけじゃないけれど、それでも私が築いた大切な居場所。

配属初日を思い出す。みんなに囲まれて緊張しながら挨拶する私を、ザインは今みたいにみなさんの輪から外れたところで見ていた。

彼への想いなんてもうないはずなのに、胸の奥がなぜか痛む。

ううん、違う。これはザインを想ってじゃないと、その痛みを振り払うように頭を振る。

……たぶん、もう二度と戻ってこれないから。

これは予感ではなく確信。

魔術師の世界はいかなる場合でも上意下達。最上位に睨まれた私が戻ってくるには、彼と対等の力を持つしかない。どんなに努力してもそんなの無理。

「みなさん、長い間本当にお世話になりました」

私が深々と頭を下げると、同僚たちは別れの言葉を告げてくる。

ザインは何も言わず、ロザリーはというと「……元気で、アリスミ」と離れたところから声をかけてきた。周りに合わせているのだろう。

込み上げるものがあつたけれど、意地でも涙なんて見せたくない。

「本当にありがとうございます！」

私は声を張り上げて最後に感謝を告げると、六年間勤めた居心地のいい職場を笑顔であとにしたのだった。

自宅まで早足で戻ると、急いで必要なものだけを大きな鞆かばんに詰め込む。それさえ済めば旅立つことができるように手配されていた。

『急な異動辞令だったので、借家の解約はこちらで行います。残した物の処分は買い取るという形を取らせていただきます。よろしいですか？ カロックさん』

『はい、お願いします』

挨拶を済ませたあと、事務方に向向いて異動に関する書類に署名していると、そう告げられたのだ。

そのときに前払いですと少くない金額を渡されたのだが、置いていく家財道具の対価にしてはどう考えても多すぎた。こんなに受け取れないと言うと、上が用意したものですからと半ば無理矢

理押しつけられたのである。

何もかも周到に準備されていた。

「……こんなに必死な彼は初めてね」

思わず自嘲じちょうの声が漏れる。私には引き出せなかったザインの一面を、ロザリーはいとも簡単に引き出した。

……本当に敵わない。

荷物をまとめ終わると、住み慣れた家を丁寧に掃除する。立つ鳥跡を濁さずだから。

床のシミ、ドアノブの曇りをゴシゴシと落としていくと、染みついた匂いが薄れる気がした。

ひと通り拭き終わると、彼との思い出が詰まった家から私たちの気配が完全に消えていた。

「今までお世話になりました」

荷物を持って玄関の扉を開けてから、ゆっくりと家の中を見渡す。運び出す荷物は服ぐらいなのに、やけにガランとしている。

こんなに広かったかな……

ふたりで住んでいるときは狭いと思っていたのに、どうしてだろうと首をかしげる。

すぐに、ザインの荷物がなくなっているからだと気づく。退院してこの家に戻ってきて数日経つけれど、彼のことを考えないようにしていたから気づかなかつたのだ。

ひとりで住むにはこの家は広すぎる。

理不尽な異動だったけど、これで良かったのかもしれない。

外に出て近くにある時計塔——王都では警備のために建てられた物見櫓に時計がついている——を見上げ時間を確認すると、正午まであと二時間あった。

ここから王都の外れにある南門までの移動時間を考えても、まだ時間に余裕がある。私はある場所に急いで向かう。王都から去る前にどうしても会いたい人がいた。

「アリスミ、よく来てくれたわね」

「院長先生……」

小さな古ぼけた孤児院の前で、その人は私の到着を待っていてくれた。訪れる前に紙魔鳥を送ったからだろう。

魔力を紡ぐ能力があると認められた者は、十歳から魔術師養成機関の寮で暮らし学んでいく。私もそうだったけど、両親が頻繁に会いに来てくれたので寂しくはなかった。

しかし、私が十二歳の冬、両親は流行り病で亡くなった。

魔術師候補は貴重なので私の生活は保障されていた。でも、帰省する場所を失った私は、長期休みも寮で過ごすことになった。

『今度お父さんと旅行に行くんだ！』

『お母さんったらまた手編みの靴下を送ってきたわ。ダサいからいらなくて言ってるのに』以前は気にならなかった何気ない会話を、私は耳を塞いでやり過ごすようになった。

そんな私のもとに、ある日年配の女性が訪ねてきた。

『良かったら、休みの日は家に来ない？ 家と言っても孤児院だから賑やかで、落ち着かないで

しょうけど』

『私がお邪魔していいんですか？』

『もちろんよ。さあ、行きましょう。昨日から冬休みだと聞いたわ』

母は生前、その女性——院長先生が営んでいる小さな孤児院の手伝いをしていたらしい。その縁で私に手を差し伸べてくれたのだ。

その日からまた私に帰る家ができた。そして、院長先生は私にとって第二の母となった。ザインのことも紹介していたし、休みの日に彼と一緒に子どもたちの世話を手伝うこともあった。

『おじさん、怒ってるの？』

ザインを見た子どもがおそろのおそろ口をひらく。

『……いや』

『怒ってるよね？ だってすごく怖い顔してる。お口が全然笑ってないもん』

『……』

子どもはとても正直で、そんなときはすかさず私がフォローした。

『怒ってないから大丈夫よ』

『じゃあ、おじさんのお顔のお肉、死んでるの？』

『それは……どうかな……』

聞いてくる子は違えど、似たようなやり取りを何度も繰り返した。

孤児院は私にとって大切な場所だから、彼なりに頑張ってくれていた。だけど、もう二度と彼が

ここに来ることはないだろう。

「辛かったわね、アリスミ。よく頑張ったわ」

院長先生は私を抱きしめて、ぼんぼんと優しく背中を叩く。

ザインとの別れも今回の異動辞令も、ただ事実として紙魔鳥で連絡していた。どんな気持ちだったとか、どんなに理不尽なものなのかとか、そんなことは一切伝えていない。それなのにすべてを分かってくれているようだった。

「……どうして分かるんですか？」

「年の功だと言いたいところだけど……」

途中で言葉を紡ぐのを止めた彼女は、皺だらけの手を私の頬に当てる。さっきまで乾いていたはずのその手はしっとりと濡れていた。

「だって泣いてるじゃない。あなたは我慢強い子で、簡単に泣いたりしなかった。ずっと泣けなかったんでしょ？ みんなの前で頑張って笑っていた。そうよね？ ここでは泣いていいのよ、アリスミ。あなたは十分に頑張ったわ、だからもうこれ以上ひとりで苦しまないで」

「……っ、うっうう……せ、ん……せい」

麻痺していた心がゆっくりと解けていく。

押し込めていた感情が溢れ出して、また苦しくなる。

みっともなく泣く私を、彼女は「もう大丈夫、絶対に大丈夫」と優しく抱きしめてくれた。その優しさに私は甘え、彼女の胸に顔を埋める。

——やっと泣けた。

今は苦しくとも、本当の意味で前に進める気がした。

気づけば周りには子どもたちが集まっていた。どの子たちも心配そうな顔をして私たちを見ていて、中にはつられて涙ぐんでいる子もいる。私は慌てて涙を袖で拭う。

「あのね、私、お仕事で遠くに行くの。しばらくの間みんなとも会えなくなるわ。だから、寂しくて泣いてしまったのよ。さよならの涙だから大丈夫よ」

「お姉ちゃん、ばいばいなの？」

「うん、ちょっとだけばいばいかな」

ひとりの女の子に答えると、子どもたちは小さな手を振ってくれる。

ここで暮らしている子は数人だけ。あとは昼間だけ預かっている子たちで出入りが激しい。なので、みんなが私のことを知っているわけではない。

「……ちょっとだけってどれくらいなの？」

毛糸の帽子を両手でぎゅっと引っ張って、頭をすっぽりと隠している男の子が聞いてくる。四歳くらいだろうか、髪の色も見えないけど、たぶん会ったことがない子。

「ごめんね、お姉さんにも分からないの」

「おねがい、おしえて……」

聞いてきた声は涙声だった。小さいけど男の子だから、泣いてる顔を見られたくないのだろう。だから、帽子をああしているのね……

「困らせてはだめよ。さあ、こっちにいらつしやい」

院長先生はその男の子をそっと抱き上げて、私にしてくれたように背中を優しく叩く。その子は「うえーん……」と可愛らしい泣き声を上げる。初めて会う私のために泣いてくれるのだから、とても優しい子なのだろう。

毛糸の帽子の上からその子の頭を撫でると、小さな手が私の手をぎゅっと握った。その仕草は、仕事に行く前に孤児院に子どもを預けに来る親に、子が見せるものに似ていた。

もしかしたら、この子は親との朝の別れを思い出してしまっているのかもしれない。

ごめんね、悲しい気持ちを思い出させて。

こちらから解くことをためらっていると、院長先生が「もう時間だから」と彼の手をそっと解く。私は少しか腰をかがめて、男の子の隠れた目と高さを合わせる。

「また、いつか会えるから。それまで、いい子でいてね」

「……うん……」

「院長先生、行ってきます」

正午に南門に着くには、そろそろ向かわなければ間に合わない。子どもたちに手を振りながら歩き始めると、院長先生が男の子を抱いたまま走ってきた。

「アリスミ、幸せになって！ 新たな地で幸せを見つけなさい」

院長先生はザインとの別れを私が引きずることを案じているのだろう。『私、自分から彼にプロポーズするつもりです。先生』とうれしそうに報告したから。……あんなこと言わなければ良

かった。

肩で息をする院長先生に向かって、笑顔を作ってみせる。

「先生、ありがとうございます。私、頑張りますね」

「この子が渡したいものがあるそうなの。受け取ってあげてちょうだい」

抱かれたままの男の子はまだひুকひুক泣いていた。

でも、小さな右手を懸命に伸ばして白い花を差し出してくる。白くて柔らかくて、思わず握りしめたいくなるような手。

「ありがとう、ずっと大切にするね」

「……うん……」

いろいろなことがあつて疲れ切っていた心が、この小さな優しさに救われた。

正午、きつかりに馬車は南門を出発した。六人乗りの馬車は貸し切りで、私しか乗っていない。もしかしたら泣き叫ぶとも思われていた？

誰にも迷惑がかからないようにと手配したのなら、その期待に応えるべきだろう。

私は声を出す前に思いつき息を吸った。

「幸せになつてみせるんだから、絶対に！」

叫んだのは新たな決意。

私は鞆なげんから本を一冊取り出すと、白い花をその間にそっと挟んだ。渡されたときにはすでに萎しおれ

ていたので、押し花にしようと思っていたのだ。

名前も知らない天使のような男の子からの贈りもの——なぜか愛おしくてたまらなかった。生まれ育った王都をもう一度だけ見ようと馬車の小窓を下ろす。どんどん小さくなっていく王都から、一羽の鳥が空高く優雅に舞い上がったように見えた。

見送りさえない慌ただしい旅路を、憐れに思った鳥が見送ってくれているのだろうか。

「……そんなわけないのにね」

自嘲しながら、静かに窓を閉めたのだった。



……やっぱりここにいたのね。

青銀の髪が強風に煽られ乱れているのに、構うことなくその男は突っ立っている。

そんな様でも男の美しさは損なわれていないどころか、色気が増している。

……本当、憎らしいわね。

見た目だけは、私——ロザリーの隣に相応しい男。

王宮内で一番高い塔は魔術師長が管理していて、魔術師ならば自由に出入りすることができる。普段、この細長い塔に足を踏み入れる者はいない。ただ高いだけで何があるわけでもなく、登っても疲れるだけだからだ。

実際ここまで上がってきた私は、口を開く前に息を整える必要があった。

「ここで何をしているの？」

私に背を向けたままの男に尋ねる。

ここで何をしているか想像はついているし、この男が返事をしないだろうとも思っていた。

「……」

案の定、返事はない。チラッと視線を寄越ただけで、表情ひとつ変えずに何かを視ている。

無視しているつもりはないのだろう、この男はそういう人間なのだ。

正午の鐘が鳴ったのは数分前。南門から出発した馬車はもう二ーダルに向かって走り出しているはず。

ここから南門を目視するのは無理だけど、この男は紙魔鳥を通して視ているのだ。

普通の紙魔鳥にそんな能力はない——あれは喋る手紙のようなもの。

でも彼が作ったそれは、その目に映したものを作り主に認識させるらしい。そんな馬鹿げたことができるのは、目の前にいる最上位魔術師ザイン・リシーヴァのみ。

この変態野郎、覗きなんてやめなさい！

苛立たしげにヒールを打ち鳴らし、心のなかで盛大に悪態をつく。

遠慮して口に出さなかったわけではない。言ってもこの男は反応なんてしないだろう。そうすると、私のほうが馬鹿みたいだから言わなかっただけ。

私はこの男が苦手だ。いくら最上位魔術師で美形だといっても、何を考えているか分からず、い

つも無表情。そのうえ、言葉でそれを補うこともしない。

はっ？ 察してくれとでも？ 甘えるんじゃないわよ！

面倒くさい人間の相手をするなんて時間の無駄。私は仕事以外で関わらないようにしていた。……あの日までは。

『ロザリー、紹介するね。じゃっじゃーん、私の恋人です』

『……アリスミ、いつから付き合っているの？』

私は目を見開き尋ねた、冗談であつてくれと願いながら。

『ん？ 正確には昨日かな。少しづつ仲良くなつて気づいたら、こうなつていて。でも、きちんと言葉にしていなかったから、昨日私のほうから付き合いましようつて言つたの。ね？ ザイン』

はにかみながら話す親友の隣で、その男は無表情を崩すことなくうなずいていた。

八等級アリスミ・カロックの隣に最上位ザイン・リシーヴァがいる。

……ありえないわ。

あの日を境に、私はこの男と関わるようになったのだ。

そして、驚きは徐々に苛立ちへ変化していく。

ふたりの関係を、相応しくないと言う者もいた。私は心のなかでその意見に激しく同意していた。もちろん、そんな素振りを見せることはなかったけど。

最上位であるザイン・リシーヴァと八等級であるアリスミ——最初から釣り合いなんて取れていない。

彼の相手がアリスミでなかったら、私は彼とこんな関係になどならなかった。私はこの男を爪の先ほども愛していないのだから。

——親友から大切な人を奪うことに意味があつたのだ。

私は男の背中を容赦なく睨みつける。視線に気づいているだろうに、一向に振り向く気配がないのでイライラしてくる。空気を読むという当たり前のことすら、この男はしない。

でも苛立った口調は美しくないから、頬を引きつらせながらも優雅に話す。

「私たちで決めたことよ。今の恋人は三等級のこの私でしょ？ 覗き見なんて悪趣味な真似やめてね。品位に欠けるわ」

この男の性格を考えたら、こうなるだろうとは予想はついていたけど。本当に女々しい男。

罪悪感？ 情？ 自己満足？ それとも後悔している自分がお好きなのかしら？

彼の心の内を優しく尋ねたりしない。知りたくもないし、仮に知ったとしても寄り添う気などない。ふんっ、もう後戻りはできないというのにな。

それはこの男だけではなく私も同じ。……でも、私は絶対に振り返らない。

私はふふっと嫌味を込めて愚かな男を嘲笑う。聞こえているはずなのに、彼は私を気にかけることなく、まだ視ていた。

まったく嫌になる。本当に私の親友は男の趣味が悪いわね……と思つてから訂正する——元親友と。

「私はお優しい八等級とは違うわ。ナメられるのが許せない質なの。もし今後こんな真似をしたら

三等級の実力でお仕置きしてあげる。それともそれがお望みだった？ それなら遠慮なく続けてちょうだい、足腰立たなくしてあげるから」

「……」

バチバチッと私の手のひらの上で紡いだ魔力が踊り始める。こんな脅しなんて最上位に通じるわけはないと分かっている。でも、我慢の限界だったのだ。

彼はゆっくりと振り返る。やっと反応した。ここまで馬鹿にされたらさすがに黙ってられない、と思ったのか。勝てないだろうけど、そのお綺麗な顔にかすり傷くらいつけてやるわ。

視るのをやめた変態は、構えている私の前を素通りしてひとりで塔を下りていく。

「これどうしてくれるのよ！」

行き場を失った魔力を、私は無造作に空に放つ。

……結局ひと言も喋らなかった。本当に徹底しているというか、ぶれない男である。

あの男の心が欲しかったわけじゃない。欲しいものは手に入ったのだから、後悔なんてしていない。けれども、さすがにあればないわ……

先ほどまで男が立っていた場所——一番見晴らしの良いところまでツカツカと歩いていき、身を乗り出すように塔のふちに手をかける。

「なんで、あんな男と付き合ったりしたのかなー。あれじゃ金魚のほうがましでしょ！ だって喋らなくともパクパクと健気に口を動かすもの」

南のほうを見ながら絶縁宣言してきた元親友に愚痴ってみた。

もちろん返事はない。……まあいいけど。

これからあの子はド田舎で生きていく。きつと垢^{あか}抜けない——釣り合った相手と、笑ってしまうほど平凡な暮らしを手に入れるのだろう。

私がそれを欲することはない、だって意味がないから。何より私にはそんな生活、似合わないだろうしね。

「あつはは、だーいすきよ、元親友」

南の空に向かって声を限りに叫んでみる。すると、規則正しく聞こえていた階段を下りる足音が少しだけ乱れる。

どうやらあの男の耳に届いたようだ。澄ました男が階段を無様に踏み外す姿を想像し、私は久しぶりに腹の底から笑った。

第二章 可愛い弟子

「もう終わった？ アリスミ」

「ええ、こつちに逃げてきた仔はこの通り捕まえたわ」

「まったく嫌になるよな。こんな依頼ばかりでさ。一応聞くけど、俺たちってまだ魔術師だよな？」

私と同僚であるトルタヤ・ルガンの腕の中には可愛い仔羊がいて、「メエー」と呑気に鳴いている。その声に引き寄せられた大人の羊たちに、私たちはあつという間に取り囲まれてしまう。

もはや脱出する手段はない——のどかの極みである。

枯れ草を頭につけた私は遠くを見ながら、願いを込めて答えた。

「……たぶんね」

ニーダル地方に異動して早いもので二年が経った。

王都と違ってここは大変平和な町である。

一応は町と定義づけられているものの、その実態はほぼ村で、魔術師が活躍する機会がほとんどない。それは大変喜ばしいけれど、その弊害として本来なら魔術師の仕事ではないことを頼まれる。断つても良い——いいえ、断るべき案件なのに、支部長は助け合いの精神を掲げて、安易に引き

受けてしまう。そのくせ、自ら出向くことは決してない。

『儂も行きたいのじゃが腰が痛くてな……』

そう言つて腰を叩く白髪の子供、もとい支部長を無理矢理連れていくことなどできやしない。ちなみに、痛む箇所はその日によつてまちまちである。本当かどうか疑わしいけれど、一ヶ月ほど前の理由『髪の子が痛くて……』は絶対に嘘だろう。まったく仕方ない人である。

今日も逃げ出した仔羊の捕獲という任務を、私とトルタヤのふたりでこなしていた。

仔羊を飼ひ主に引き渡した私たちは、その足でニーダル支部の建物に戻った。

町の中心にある建物はそこそこ大きく、それに見合った人数をあてがったわけではないだろうが、五人の魔術師が配属されている。ド田舎の支部に五人など、まさに大盤振る舞いな配置……と思われるが、実情はそうでもない。

現在、出勤しているのは三人だけで、そのうち実際に労働に勤しんでいるのは私とトルタヤのみ。どういふことかといえば、私が異動したとほぼ同時にふたりが産休に入り、現在も育児のために休んでいて、復帰は一年後の予定なのである。

魔術師は貴重なので、世間一般よりもこういう融通が利くのだ。

補充要請しないのは、普段は三人でも困っていないから。仔羊を追いかける暇があるくらいなのだから当然である。

その代わり臨時で人手が必要ときだけ、魔術師の派遣を要請する。そのための予算もしっかり組まれていた。

「爺様、任務完了しましたー」

トルタヤは戻るなり、支部長——トルタヤ・ルガンに大きな声で報告をする。

そう、この支部には『トルタヤ・ルガン』がふたりいた。

彼らは血が繋がっており、ひ孫のトルタヤが曾祖父の名をもらったのだ。ふたりが将来、同じ職場で働く可能性など考えずに名付けたのだろう。長生きはともかくとして、現役とはすごいことである。

ややこしいので、支部長のことをみんなは『長老』と親しみを込めて呼んでいる。

「最後の長い棒はいらんぞ、トルタヤ」

「へいへい。任務完了しました」

「返事は『はい』じゃ」

「はい」

「長い棒が出戻つてきとるぞ。うつほほ、儂、うまいこと言ったな」

長老は自慢の白髭を撫でながら、自分の駄洒落にひとりで笑っている。

「俺の母さんも去年離縁したんだよねー」

「おつ、奇遇じゃな。儂の孫も去年別れたぞ」

トルタヤの母は長老の孫、つまり同一人物。

ふたりの軽妙で微妙にズレた会話に、くすりと笑う。

彼らは一緒に暮らしていない。長老は何十年も各地を転々としていて、この土地に戻ってきたの

は十年ほど前だったらしい。会ったのもそのときが初めてだという。

爺様と呼んでいるけれど、彼を生まれたときから知っているその辺のお年寄りのほうが親戚感強いと、ひ孫のトルタヤは笑って教えてくれた。

それでも血が繋がっているからか、ふたりの息はぴったりだ。

この緩さ……ではなく、温かさとのんびりした土地柄のおかげで、私の心の傷はゆっくりと癒えていった。

ニーダルに來た頃は悪夢で枕を濡らすことが多くて、目元を水で冷やすことから朝が始まった。でも、その習慣はいつの間にか必要なくなった。

もうすっかり立ち直っていると思う。ザインやロザリーの活躍を耳にしても、すごいですねと適当に相槌を打てるようになったのだから。

彼らは邪魔者である私をニーダルへ追い出した。王都から離れていたら場所はどこでも良かったのだろうが、神様は私に味方してくれたのだと思う。

——前を向いて頑張れと。

「そうなの？ 奇遇だね……なんて言うかよ！ 俺、爺様のひ孫だぞ」

「うっかり忘れとった。だが、道理で男前のはずじゃ」

「全・然・似・て・な・い！」

トルタヤは一字ずつ区切つて主張する。

彼は黒目で、緑がかった黒髪を短髪にしている。がっしりとした体格で、魔術師に支給されてい

るローブを動きやすいように短く詰め、活発な少年がそのまま大人になったという感じだ。

一方、長老はといえば瞳は濁った灰色で、髪も立派な髭も真っ白。足首まであるローブをいつもすつぽりと羽織っており、その様はごんまりとした好々爺。

トルタヤに長老の面影はないけれど、若かりし頃は似ていたのだろうか。

終わりそうにないやり取りに頬を緩めながら、私は報告書を書く準備を始める。任務についての詳細を記すのは決まりとはいえ、仔羊の捕獲の報告書なんて必要ないと思う。でも、毎回律儀に書いてしまうのは、そういう性分なのだ。

紙の上でペンを走らせていると、長老が話しかけてきた。

「そうじゃ、カロック。ダシはいらんか？ はて？ 何かおかしいような……。おお、儼としたことが間違えておった。ダでなくデじゃ」

ひとり問答したあとに、長老はポンと拳で手のひらを叩く。

「ダじゃなくてデ……？」

しばらく考えて『弟子』という言葉に辿り着く。出汁と弟子——一音違いだけど普通は間違えない。

もしかして、ボケてしまったのかしら？

確かめたほうがいいけれど、一旦それは置いておくことにした。それよりも、今気になるのは弟子発言のほうである。

「長老様、弟子とはどういう意味ですか？」

「カロック、そんなことも知らんのか？ ずばり、教え子のことじゃ」

「それは知ってますけど、魔術師に師弟制度はありません。もしやお忘れですか？」

魔術師は国が設置した養成機関で学んでから、正式に魔術師と認められる。

極々稀に事情があつて師弟関係を経て魔術師となる者もいるが、ただその場合だって、師となるのは上位の魔術師——最低でも二等級以上でないとだめだ。

なぜなら稀な事情とは、魔力過多だからだ。膨大な魔力を有しているのに、紡ぐ術を知らない者
は身近な者を意図せず傷つけてしまうことがある。

危険すぎて養成機関に入れられないと判断された者が、個別に教わるのだ。

そんな人は数百年にひとりいるかどうかで、私が知っているのはあの人だけ。

「……ザイン……リシーヴァ」

聞こえないほど微かな声が私の口から漏れる。この名を紡いだのは久しぶりだった。

私ったら何を言ってるの……

軽く頭を振って、今考えるべきことに集中する。

私は一年前に等級が上がって七等級になったけれど、まだ下から数えたほうが断然早い。それを知っている長老が、私に弟子の話をするなんて……そもそもおかしい。

訝しげに長老を見てみると、横からトルタヤが「ちよつと待った！」と口を挟む。

「その話自体がありえないけど、最初に話を振る相手は五等級の俺じゃない？ 爺様。まあ、俺
だつて抑えられる自信なんてないけどさ、魔力過多の奴の暴走なんて。あつはは、呆気なく死ぬ自

信ならある」

トルタヤも同じことを思っていたようだ。

彼は私より二歳年下だけれど、等級はふたつ上。ふたりとも等級的に師の器ではない。しかし、どちらがましかと言ったら彼のほうである。

それにやんちゃ坊主に見えるけど、その実、中身はしっかりしていて頼りになる人だ。

私とトルタヤが探るようにじつと見ると、長老は目を泳がせながら「びゅっ、びゅっ」と下手な口笛を吹く。やはりこれには裏があるようだ。……それにしても、なんて分かりやすい態度。

「爺様!!」

「長老様!」

私たちがじりじりと詰め寄ると、少し間があつて長老の口がももごと動く。

「防御術式の総入れ替えの時期じゃろ?」

それは知っていると、ふたり同時にうなずく。

魔術師にとって国防は最も大切な任務とっていいだろう。どこに配属されようが、防御術式を施す任務はついて回る。

王都のものとは比べものにならないほど簡易なものだけど、田舎もそれで守られている。

ニードルはとても広い土地なので、数年ごとの入れ替えでは十人ほど助っ人を頼んでいた。

確か近々やってくると、長老からは聞いている。

「爺様、それが弟子の話とどう関係あるんだ?」

「実は予算を使い切ってしまったてな。老眼でゼロをひとつ、いや、ふたつじゃったかな? ……ま

あ、間違えてしまったんじゃない」

「はあっ!?!」

「えっ……」

トルタヤと私は目を見開いたまま固まってしまう。

防御術式の総入れ替えの時期はずらせないし、始めたら一週間以内に終わらせる必要があつた。そうしないと術式に穴がでやすいのだ。

魔術師の派遣は無償ではない。でも、肝心の予算がもうないという。

トルタヤは五等級で、私は七等級。長老の等級は知らないけれど、等級がいくつだろうと働かないので頭数には入れられない。

——ふたりだけでなんて絶対に無理。もし一週間以内に終わらせようとしたら、魔力の放出過多によって私たちは途中で息絶えるだろう。間違いない。

額に青筋を立てたトルタヤは、長老の胸ぐらを両手で掴むと容赦なく揺さぶり始めた。

身長差があるから長老は宙吊り状態となり、捕獲されたうさぎのように足をバタバタさせている。

「……た、助けるんじゃない、カロック」

「……」

止める代わりに、私はどうぞ続けてと、トルタヤに目で合図を送る。

「爺様、どうにかしろ! そうだ、その体売れ! 年寄りがいくらになるか、今すぐ屠畜場^{とちくじやう}に確

認する。アリスミ、紙魔鳥^{シマヤチドリ}を飛ばしてくれ」

私が近くにあった紙を折り始めると、長老は息も絶え絶えに「さ、最後まで聞くんじゃ……」と続きを話し始める。

予算を使い切った長老は、知り合いの魔術師に泣きついたという。最初は仕事があることを理由に断られたらしい。……それはそうだ、無職の魔術師はいない。

あとがない長老は『恩を忘れたのか！ 昔の借りを返せ、すぐ返せ、今返せ！』と本人曰くそれはもう丁寧^{ていねい}に頼んだらしい。……脅しを丁寧^{ていねい}と言ひ換えるとは、独創が過ぎる。

その魔術師は『分かりました』とうなずいたという——とても心が広い人である。ただ、その魔術師には小さな子どもがいるので同伴が条件だったらしい。

「防御術式の入替えに一日中付き合うんですけど、子どもには退屈じゃろ？ だから、知り合いの婆^{ばあ}さんに日中の子守を頼んでいたんじゃ。なのに、婆^{ばあ}さんの奴め、数日前にぎっくり腰になってな……。年寄りはこちらだから困るんじゃ」

自分のことを棚に上げて、長老は勝手なことを言っている。

つまり予算を使い切ったことを隠したまま、なんとか乗り切るつもりだったのだ。だからトルタヤではなく、子どもの相手に慣れている私に話を振った。子守をしてほしかったんですね……

「爺様、助っ人がたったひとりで意味あるの？」

「上位の魔術師だから大丈夫じゃ。ただのー、仕事に集中してもらわないと……」

長老は目をうるうるさせながら、私を見ってくる。

この状況を考えたら、ニーダル支部の一員として協力するしかないだろう。防御術式の入替えの延期はできないのだから。

「一週間ほど子守をすればいいんですね？」

「カロック、その言い方はいかん。弟子じゃ」

「なぜ弟子なんですか？ もともと子守を頼んでいたのなら、子守役が代わったで良いのでは？」

そう尋ねると長老は白状した。

私に子守を頼もうと考えたとき、魔術師が責任持つて面倒みると相手に紙魔鳥^{シマヤチドリ}を送ったらしい。すると先方から『弟子入りだよ』と子どもが大喜びしていると返事があったのだと。

……後に引けなくなっただんですね、長老様。

「後生^{ごしょう}じゃ、カロック」

「……分かりました」

小さくため息をつきながら、期間限定の弟子をとることが正式に決定した。

「うっ、うう……。こんなにうれしいことはないぞ。長生きはするもんじゃな。神様、仏様、カロック様じゃ」

調子の良いことを言いながら、長老が手をヒラヒラさせ小躍りを始める。それにしても立ち直るのが早い、年の功だろうか。

……ううん、性格ね。

すぐさま訂正したあと、これから会う弟子について考える。

子どもは好きだし、どんな子だろうと仲良くなれる自信もある。孤児院での経験からそう思っている、トルタヤの声が長老の舞いを止めた。

「ところで、爺様。その魔術師はいつ来るんだ？」

「今日の午後の予定じゃ」

「……」

時計の針を見ると、正午を指していた。

部屋を掃除したり心の準備だったり、客人が来るときはやっておきたいことがある。

それに子どもが来るならば、甘いお菓子だって用意しておきたい。なんでもっと早くに話をしてくれなかったのだと、私とトルタヤが頭を抱えていると、誰かが扉を叩いた。

私たちが顔を見合わせ「まさかね……」と言っていると、長老は出入り口に向かってスキップしていく。そして、勢いよく扉を開け放つ。

「おお、よく来てくれたな。ふたりとも」

部屋に入ってきたのは、一般的な旅装である頭まで隠れる黒い外衣を纏った大人と子どもだった。子どものほうは落ち着かないようで、きよろきよろと周りを見ている。

きつと恥ずかしいのだろう、魔術師である親の後ろに隠れるようにしていた。ふふ、可愛いな。

子どもを安心させるには笑顔が一番。彼らに微笑んでいると、大人のほうが外衣を外しその顔を晒した。

「お久しぶりです、ルガン様」

——ザイン・リシーヴァが、また私の前に現れた。

彼の姿なんて目に映すのも嫌なはずなのに、惹き寄せられるように彼から目が離せない。

……なぜなの……？

心のなかで自分自身に問いかける。

彼への想いはもうすべて消えたはず。証明だってできる。ニーダルで毎日楽しく過ごしているのが、その最たる証拠。心の奥に想いが残っているはずはない。

では、どうして今も目が離せないの……

もう一度問いかけると、求めていた答えが出た。……そう、きつと変わっていないからだと思う。青銀の長髪、切れ長の目、真っ直ぐに伸びた鼻梁。すべて二年前と同じ。保たれたままの彫刻のような美しさに、二年という歳月は彼に洪みという大人の色気まで与えていた。……私と別れて正解だったようである。

「遠いところよく来てくれたのう。彼こそが、今回の任務を快く引き受けてくれた魔術師ザイン・リシーヴァじゃ」

長老は最上位魔術師のことを簡単に紹介すると、目尻の皺を深め、一方的にザインに喋り続けている。正しくは『ザインと話している』だけど、彼はほとんど言葉を返さないから、長老がひとりで話しているように見えるのだ。

……相変わらずなのね。こういうところも変わっていない。

彼の目には私も映っているはずなのに、その表情が変わることはない。